「医学図書館の役割と医学情報センターとの統合」に参加して

松 原 良 知

兵庫医科大学 学務部図書課

I. はじめに

私は、開学2年目の兵庫医科大学（以下、本学と言う）に勤務して30年になる。本学の教育・研究・診療における画像や映像を取扱う技術者として現在に至っている。本学教育関係者は、開学当初よりメディア機器を活用した視聴覚教育の重要性を説き、1975年に視聴覚教育委員会を設置し視聴覚準備室を設立、1977年に中央写真室を統合、1984年には視聴覚教育センターと名称を変更し学内における視聴覚設備の充実を図り、本学独自の教材コンテンツの開発に努めてきた。1999年より図書館との統合が話題となり学務部図書課に視聴覚教育係として技術員3名が配属されたが施設の統合は未だ結論が出ていない。最近では学内LANの基盤整備が進められて行くなかで、電子ジャーナルの導入や図書資料のデータベース化を積極的に行い、電子図書館的機能の充実を図り情報サービスの提供や図書館利用の向上に務めている。視聴覚教育センターでは、画像配信システムを導入し医療画像やリアルタイム映像を配信するなど、学生教育用の画像配信システムの構築に務めている。私の図書課在籍は5年にもなるが、具体的な図書業務への関わりは最近の1年間である。医療情報センターへの統合や医学教育学の設置問題については、学内外問わず話題性が高いことからこの企画に興味を持ち参加した。

II. 図書館と情報処理センター統合の現状について

第4分科会は「医学図書館の役割と医学情報センターとの統合」をテーマに、各医科大学図書館の館長先生をはじめ、事務長、図書課長、専門司書、各メーカーの方々など30名程の参加者であった。このテーマについては、司会者である茂幾周治理事が所属する大阪医科大学でも論議されており、個人的にも興味があることからテーマ

として取り上げて頂いたと説明があり、話題提供として札幌医科大学附属図書館、大阪市立大学学術情報総合センターの2施設が紹介された。その後、図書館と医学情報センターの統合についての情報交換を行いその対策を考えるとの進行で始まった。

札幌医科大学附属図書館は、北海道の広域地域における医療の拠点としての役割や医療情報ネットワークの核として地域医療支援を果たすため、従来の図書館の概念を超えた情報センターを目指して組織機構改革が進められており、昨年度には図書館、情報センター、標本館、中央写真室の4部門からなる組織を統合し、附属学術情報総合センター（仮称）の設置を検討していると報告があった。図書館サービスの特徴として土日祝日も含めた24時までの開館、学術リンクシステムによるone stop shopサービスの提供、地域医療支援サービスへの展開としての図書館利用、文献複写サービス、道内医療機関発行誌、論文等の電子化支援など、情報センターとの整備統合に現在取り組まれている現状について今野穂氏より報告された。

大阪市立大学学術情報総合センターは、1996年10月、従来の紙媒体だけでなく多様化するメディアやネットワークメディアにも対応できる図書館を目指して、個人やグループの学習と研究を全面的に支援する施設、高度な情報処理と通信機能を持った情報型図書館、シンボル性を持ったインテリジェント化した中枢施設など、これらの理念を実現し「図書と情報の館」として市民に対し還元するため、従来からあった計算センター、図書館、情報処理教育部門の3施設を統合として一体化を計る目的でオープンしたと土屋久子氏より報告された。

さらに、分科会出席者の中から、独協医科大学の森戸重男氏、前日の講演パネリストである明海大学 奥村泰彦先生からもメディアセンター開設当時の事情や施設の運用状況等について紹介があった。

図書館の情報センターとの統合は、冊子体、電子ジャーナルだけでなく画像、映像、音響といったメディア情報の収集・蓄積・配信も含めたデジタル情報の形態を扱う

*Yoshitomo MATSUBARA : 〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1-1.

(2004年7月26日 受理)

電子図書館的機能が要求されるとともに、各施設の独自性が発揮できるデータベースの構築や、情報の発信基地としても機能するよう努めなければならない。一方、高騰し続ける外国雑誌の状況を勘案しやむを得ず雑誌購入枠を縮小する現状にあって、統合によって突出化する施設運用経費の予算確保、施設内での予算配分、人事の集約管理や、電子ジャーナルへの移行に伴う1次・2次データの運用管理、電子メディアを取扱う利用者および図書館員の情報メディア教育等について意見交換した。

Ⅲ. おわりに

本学の統合問題においては、図書館業務の自動化、情

報のデジタル化、情報のネットワーク化等の変化に対する利用者の要求にも柔軟に対応できる施設設備の運用、図書館サービス、関係部署との連携、地域の関連機関との連携等の機能面の充実も含め高めて行くことが必要である。将来の少子高齢化社会では、生涯学習のニーズが高まり、図書館はますます地域貢献・社会貢献が求められて来るであろう。また、急速に進む情報環境の整備拡充は、今までの図書館とは違う発想が必要となるだろうが、視聴覚教育センター、あるいは医療情報センター、医学教育センター(仮称)、スキルスラボ(仮称)等と統合した後、どこに司書としての専門的職務を発揮するのか、図書館員自身もしっかりした方針を立てておくことも必要である。

第4分科会 「医学図書館の役割と医学情報センターとの統合」

話題提供者：今野穂（札幌）、土屋久子（阪市）

司 会：茂幾周治（阪医）